

湘南 国木田独歩記 (四)

神 野 幸 人

(会員 鎌倉市台)

散歩道

(その三 由比ヶ浜・滑川・妙本寺・八幡宮)

僕は昨日滑川に鯉(はぜ)を釣りに行った。釣りにいくというが大変、おほげさであるが、釣れても釣れなくても、ただ大公望然と糸を垂れて居て時間さへ経てば其で僕の目的は達して居るのであるから、小さな滑川の畔でも僕の釣には沢山なのである。

君も御存知の橋、長谷から海浜院の前を通って材木座の方へゆく道にある橋、あの橋の下で、乱杭の上に蹲(うづく)まって居ると、橋の上を折々人が通る。然し最早春の中程であるから、通る者は多く地の者で珍しさう他人の釣を橋の上から見物する。悠長な都人士は殆ど居

ない。

(鎌倉夫人)

或日、自分は例(いつ)ものやうに滑川の辺まで散歩して、さて砂山に登ると、思ひの外北風が身に沁むので、直ぐ麓に下りて其處ら日あたり可い所、身体を伸して楽に書の読めさうな所と四辺を見廻はしたが、思ふやうなところがないので、彼方此方と探し歩いた。すると一個所、面白い場所を発見した。

砂山が急に崩げて草の根で僅にこれを支へ、其下が崖のやうになつて居る。其根方に坐つて両足を投げ出すと、背は後の砂山に靠(もた)れ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソハに倚つたやうで、真に心持の佳い場処である。

自分は持つて来た小説を懐から出して心長閑に読んで居ると日は暖かに照り、空は高く晴れ、此処よりは海は見えず、人声も聞えず、汀に転がる波音の穩かに重々しく聞える外は四囲寂然として居るので、何時しか心を全部書籍に取られて了つた。…… (運命論者)

滑川は十二所と二階堂の谷奥に源して由比ヶ浜から相模湾にそそぐ川で、上流では河底が凝灰砂岩で、その上

水を走るさまから滑川と呼ばれ、上流より中流までは今も美しい流れで椿の候になると、周辺の生垣の椿の赤い花が浅場に集まった様は風雅である。下流は昔は葦が茂っていたようだが、今は護岸され、岸辺の埋土に雑草が生え、水も汚れて鯿姿を見ることはない。かつては、今の消防署・簡易裁判所あたりまで砂丘地帯であったという。

材木座は江戸時代材木座村と呼ばれ、中世商工業者の独占組合を座といい、鎌倉の材木座が置かれた所である。現在では逗子市小坪と境を接する海岸の最も小坪寄りの飯島地区の海上には、わが国最古の港である和賀江島がある。

由比ヶ浜は霊山ヶ崎(稲村ヶ崎)から材木座飯島までの総称で、細かくは坂ノ下附近を坂ノ下海岸、滑川から西の中央部を由比ヶ浜と呼ぶ。

現在の海岸は湘南道路が敷かれ、砂丘も松林も失われ、昔日偲ぶべきもない。鎌倉時代には小笠懸や流鏑馬などを催して武技の鍛練所として使われ、又血なまぐさい戦いの場でもあった。文治二年(一一八二)静御前の生んだ赤子が捨てられ、建保元年(一一二二)の和田合戦では

敗走した和田義盛以下の一族がここで滅亡、浜の仮屋で首実験が行われたり、新田義貞の軍勢も、元弘三年(一一三三)敗走の北条高時の軍を追って勝鬨(かちどき)あげて馬を駆けたであろう。

独歩はそれらの悲惨な人の世を頭に浮かべながら「運命論者」や「鎌倉夫人」を書いたのだろう。

光明寺の裏山に登り、稲村ヶ崎、相模の海、伊豆の山々、富嶽を染めて沈む夕日を眺むれば、七百年前、七十年前の出来事が昨日のように偲ばれる。

尚、長谷の海浜院はこの当時、結核療養所、現在の鎌倉ホテル(平成八年頃なくなった)滑川にかかった海岸橋のことであろう。

#### 鎌倉妙本寺懐古

夕日いざよふ妙本寺

法威のあとを弔へば

芙蓉の花の影さびて

我世の末をなげくかな

法よおきてよ人の子よ

時の力をいかにせん

永劫の神またたきて

金宇(こんう)玉殿いたづらに

懐古の客を誘ふかな

梢の鳩の歌ふらく

ありし昔も今も尚ほ

夕日いざよふ妙本寺

芙蓉の花は美なるかな

独歩、会心にして最後の詩である。

妙本寺は、大町比企が谷にある日蓮宗の寺院で鎌倉駅

より本覚寺の大屋根を見て夷堂橋を渡ると正面、祇園山

の美しい森のふところに抱かれている。

比企が谷は、頼朝の乳母比企禪尼の居が地名の由来、

のち、ひきよしか比企能員ら一族の居館跡だという。能員は頼朝拳

兵以来の功臣で、平家討滅、奥州征伐の戦功者、禪尼は

養母である。

寿永元年(一一八二)七月十二日に、北条政子が産気で

比企禪尼宅へ

入ったとあり、

二代將軍源頼

家はここで出

生した。能員

の妻が乳母と

なり、娘の若

狭局は頼家の

側室となり、

一幡を生んだ

ことにより、

能員は將軍の舅として権勢を増し、次第に北条氏と対立

する。

建仁三年(一一一三)九月、頼家の病気にさいし、北条

氏はその後継を一幡と実朝に分割譲与しようとしたの

で、能員は頼家と謀って北条氏討滅を策したが、逆に察

知され、仏事と称して招かれた時政の名越亭で殺され

た。子の宗員らは一幡を擁して戦ったが、敗れて自害

し、一幡も焼死した。

妙本寺境内には比企一族一幡袖塚と伝える苔むした石



妙本寺

塔がある。北と東南を山にした谷は吹きだまりになるのか、冬の雪景色も絶景地である。

明治三十五年(一九〇二)初秋、四辺閑寂として、甲古の客の心惹く妙本寺の縁に腰かけて梢の鳩の啼く入日、「時の力といかんせん」と、感一人を詩ったものだろう。蟄居生活のむなしさ、わびしさが目に浮ぶ。

#### 散歩道

#### (その四 鎌倉の裏山)

独歩が鎌倉の山歩きを詳細に書いているのは、この一文だけである。佐伯時代あれ程精力的に広範囲の山野を踏破したのに比して、余りにも狭範囲である。その貴重な山道も都市開発で偲ぶべきもないが、その一部が今も残っているので詳しく述べよう。

この名もない山野の現状調査に協力していただき、又、古き写真を提供していただいたのは常盤にお住いのお年寄りとその周辺の人々の御好意によるものです。お名前を後記してお礼と致します。

独歩の文を三段階に分けて、その足あとを述べるとしよう。

旅行好きの田山花袋に便りして、鎌倉の散歩地に来遊を促し、原田東風と以前散歩した道を案内したは、明治三十五年夏の始めである。

田山花袋が来鎌したのは土曜日の午後で、其日は朝からの雨もお昼頃晴れ初め、花袋が着いた頃は西日が新緑を鮮かに照していた。

翌日曜日は快晴、起きると先ず大仏の辺まで散歩を試み、十一時頃三人連れ立ち、午後二時に帰宅している。

#### 鎌倉の裏山

大仏の左から藤沢道を行くこと七八町、又左へ折れる田圃路の田溝にかけし丸木橋を渡りなどして丘へ登り、其丘の頂まで耕されし畑の間を峰づたいして極楽寺の谷に下る。此間約一里ばかりの散



鎌倉の裏山

歩地であるが、ツマラヌ所と言へばそれまで、我等如き田舎に生まれて田舎に育ち、今は都会に住まねばならぬ身には、却つて斯ういふ所が嬉しいので、里は近いし、煙は立つし、麦畑の盡くる所は林、林の間から海が見える。

海には帆かけ船、磯うつ浪の白い線が遙かに光つて居る。どうしても子供の時、綻びを切らして駈け廻つた所と変わらない。おまけに、三国一の富士は浮び、相模の大山は霞み伊豆の天城は煙ぶつて居るといふ多少名所があった図もあるのである。……中略……。

大仏の門前より大仏坂の切通しまでは爪先上り道、道幅二間位、荷車の轍の痕深く。土を掘りたる左右には山の聳えたる。其麓には所謂猫の額ほどの畑の段をなして作られたる。「旅をすると能くこんな道に出遇ふものだ。向の山を一つ廻ると、宿に出られるなど考へながら、重い足を曳ずつて、日の暮れ方に歩いたものだ」といつた東風君の言葉は此道の真相を穿つて居る。

大仏坂の切通しは鎌倉の地質にして初めて作り得るといふべきしろもの。左右の絶壁数十間、其頂から差出た若葉の色の鮮明なる。狭く長く限られた大空の、いや高

く仰がれて、其色の初夏に似合しからず深碧なる。みな佳し。

切通しを出ると下り坂、春ならば鶯がほがらかに鳴いて居さうな谷間に出たが、鶯は啼かず蝉の声ひときは騒がしく、頬白が遠くで囀つて居た。此の道をだんだん下つて往くと瓦を焼いて居る家がある。この家を最初に、引続いてバラバラと田舎家の一村にかかる。其中程に例の章魚をつるし精神あげを並べ、こもかぶり三樽ばかりの居酒屋兼村の若衆の合議場がある。

大仏坂のトンネルと新道が出来た年次は明確でない。鎌倉回顧によると、明治三十七年〜四十年の間であろうとあるが、明治二十七年生まれの徳増五良吉さんの話では、五良吉さんが十七才のときだと明言しているので、明治四十三、四年の頃である。それまでは大仏の切通しを通つた。

この切通しも、第二トンネルを造るとき、その残土を埋めたので今は全く昔の面影がない。独歩が形容したような切通しが数年前まで、山崎と小袋谷を結ぶ所にあつたが、山崎小学校を作るとき、その片方を削つて平にし

たので絶壁の片面のみが残り、瓦に抱き合うようにして差出した木々も支えを失って大半が切られて、狭く長く限られた大空をいや高く仰いだ昼尚暗い切通しは今はない。

切通しを出ると下り坂、今のトンネルを出て二百米程行くと右手に民家の切れ間がある。

これは大正時代、停車場に利用された所で、右手の山際の村因郎は屋号を停車場といい、昔の道の名残りがあゝる。県道はガソリンスタンド(最近、コンビニになった)の所より右に迂回するが、旧道は右の山裾を通つていて、現在、水道局、鎌倉ポンプ場と本阿弥宗景邸附近が、瓦を焼いていた家があつた処である。

先日この谷より極楽寺の谷に抜けた朝、鶯が鳴いていた。独歩は鶯は啼かずとあるのは昼間の為であろう。

さて、章魚つるし、精神あげを並べ、こもかぶり三樽を置いた居酒屋は現在、火の見下バス停前の菊島煙草店の一角である。ここは屋号をしんみせという大塚酒店のあつた処で、八雲神社の天王場(お祭のとき神輿を安置する広場)があり、火の見櫓があり、当時の若衆の溜り場であつた。その居酒屋も、火の見櫓もなく(火の見櫓

は戦時中供出した)細い旧道は新道に消され、路地となつて片影をとどめているのも、古老でないと旧道を知る人もない変わり様である。

此茶店の前を過ぎて、程もなく左へ折れて田圃路に入り、田の畦のやうな道をゆくこと二丁ばかりで丘の麓に達した。さて此処の一言せざるを得ないことは、鎌倉のものは野蒜は食はないから野蒜は唯の雑草のやうに田圃に生えて居ることである。兼ねてこれを酒の肴に食ふ筈で味噌まで用意して来たので、田圃路にかかるや吾々三人で採つた野蒜は都の酒客に見せたい程であつた。

田圃道に入るに丸木橋を渡つたとあるが、丸木橋のかかつていたのは大塚川でこの川は細いがこの打越地区は狭い谷戸故、川に橋をかけると大雨のとき堰となり水害を被るとして架橋を禁止し、大正時代、居酒屋の前にかけた橋は両岸から藤がからんだやうな橋、即ち吊り橋であり、藤掛橋と云つたが、今はバス停に待つ人の為に川もコンクリートで蓋をされている。

独歩が渡つた丸木橋は現在、琵琶苑団地入口にある橋

の近くにあったと思われる。扱て独歩等が味噌まで用意して採った野蒜の生えていた田圃は、琵琶苑入口の駐車場とそれに続く畑、建築器材置場又荒地となつて居る。五六軒の民家と三階建てのアパートを除くと昔に戻りうる。琵琶苑田地を造るときに埋めたてたのだらう。独歩は鎌倉の人は野蒜を食はないと言っているが、鎌倉の人もヌタ等にして食べている。

ただ、ここまで野蒜を採りに来なかつたと思う。第二次大戦中と戦後の食糧難時代この山野に群生していた山百合はその球根を食料とされ、絶滅したことを思い比すれば良き時代であった。

採った野蒜を洗う一段になつて、更ら



琵琶苑の徳増家

に一言せざるを得ないことが出来る。鎌倉近在では花嫁になると盛装して角隠をして、親類縁者さては兼て嫁入り先の家が往来して居る家に参上挨拶に及ばなければならぬ。風俗、所が野蒜を洗ふべく百姓家の井戸を借りることに三人の相談が決定つた其時、此花嫁が丘の麓を一人の老婦人一人の小娘に伴はれて三人とも日傘を傾けてしなしなと歩いてきた様子はまるで晝のやう。

吾々は一興を催して見て居ると、花嫁は野蒜を洗はして貰う筈の百姓家へ入つて了つた。

あたりに家はなし。花嫁の居る時井戸を借して下さいと押入るわけもゆかず頗る当惑したが、東風君遂に野性を發揮して先導を為し、三人づうづうしく押入り兎も角もして野蒜を洗ひ得たが、花嫁は障子の蔭に坐つて居たので見えなかつた。

花嫁が日傘を傾けて通つた丘の麓の道は、琵琶苑分譲地の高い石垣によつて車が通れるようになって居る。

石垣に沿つて百五十米程行くと石垣は切れ、美しい松と横の生垣に囲まれた邸があり(石崎邸)左山道に入るを狭んで、一辺をブロッタ塀と一辺を直径三十程の椿の

大木数本と、これは又直径八十糎程、羊歯がいかにも旧家を想わす屋敷の広い家がある。現在「森 省三」と表札ある家が野蒜を洗った家である（鎌倉市笛田一二七六）。

現在の琵琶苑団地とその周辺を昔は琵琶田（びわだ）と土地の人は呼び、琵琶田に一軒しか家がないので屋号を琵琶田と呼ばれたこの家は、当時今のブロック塀の処が正面で、前面は今の石崎邸もなく一面の田圃である。椿やおおきの木の大樹の外に天を衝く大きな櫟の木があり、森のような生垣の木々の下には小川が流れていた。当時の御当主は、徳増作蔵（明治二十年生）さんで、幼児にして父彦左衛門を失って、明治三十五年十五才でこの家の主人となっている。とすれば、独歩が描いた花嫁さんはこの家の人でなく、この琵琶田の縁者が挨拶に来たのだらう。この風習は戦時中まで残っていたそうである。和十九年、白橋家に嫁入したトミさん（大正十年生）は、戦時中として花嫁衣装の派手さはなくも喪服に似た服装で町内の挨拶まわりをしたという。縁者が遠いと二、三軒離れた家にも挨拶に回ったという。

戦時中の変動でこの家の家主も替わり藁屋根も赤瓦と

なり、田圃は埋め立てられ、家が建ち更に山は削られて団地となり、残土で埋められた。昔田の地に野蒜の姿を求む術もないが、当時を想像出来る写真が徳増家にあったことは、うれしいかぎりである。写真を提供していた池田美幸さんに感謝す。

野蒜は採ったし花嫁は見たし、景気よく我々は丘にのぼった。初夏とは云ひながら面上から直射する日光はちりちりと背をやき、汗はだくだく流れる。若葉の林の陰に腰を下ろし懐を開いて風を入れた時の心地——ああ夏が来た。楽しい夏が来たと、思はず叫ばざるを得なかつた。

この丘は琵琶田の台のことだろう。鎌倉山廻りのバスが常盤口より桜並木をくねって登る。笛田で下車して十米程下ると、桜の古木にまぎって、直径三十糎程の櫟（はぜ）の木が二本森をなしている所を左に折れる小路を登ると、急に展望が開けて吹く風爽かである。この丘と、その裾はきれいな畑となり専業農家が住宅の侵入を防いでいる。



程なく頂に達する。山の低い割合に眺望が広潤なので、田山花袋を驚かした。此の地平線は武蔵野・極目（きよくもく）さへぎるものがない。

また、大山よりかけて武蔵の国境をめぐる連山！箱根足柄の諸山よりかけ伊豆の岬角に連なる山脈！此等の諸山を圧して立つ富士！大磯・小磯の浜につづき、峰づたいに眺めつつ、路、林に入れば憩ひ、林を出づれば大洋！水平線は思いがけない所に高く一線を劃して居る。

小坪、葉山の磯を指点すべく三浦の岬は遠く水平線に没している。刈草を背負った村娘にも出遇った。夏ならば瓜や茄子の花盛りと唄はれさうな畑で一人の男が土を掘って居る。鎌倉の歴史は古いが、自然は常に新しい。我々は鎌倉の力の字も想ひ出さなかつた。

程よき松林を見立てて鼎座し、包を開くと中から現れたものが、麵麩（パン）にバタ、鎌倉ハム、夏蜜柑、冷酒が一壺、いかに酒を飲まぬ人でも今吾々が林の奥からそよそよと吹く風に吹かれ、草木の高き香にうたれ、富士山と太平洋の水とを我物顔にして飲んだ一杯の冷酒の味を知らしたら堪るまい。

野蒜はうまかつた。自然はウォーズウォース一卷を懐

にした謙厳な人ばかりに親切ではないらしい。感謝す。野よ山よ大空よ大海よ、どうか我々は林の中にあぐらをかいて、冷酒三杯に舌鼓を打って、自然の賜を感謝する程の野性を何時までも失ひたくないものだ。

食つてしまえば用はない。帰らうといふのが我々の流儀で頗る殺風景であるが、實際だから仕方がない。ほろ酔ひの心地たのしく又峰づたひ。眺望絶景の処へ来て、此処でやれば可かつたと叫んでも手に残るものは風呂敷ばかり。

大くたぶれに疲れて家に帰れば、二時風呂が沸いて居た。  
（明治四十一年九月）

程なく達した頂は、今しのお塚がある処？琵琶田の台からここまでは途中民家が五、六軒あり、又新道が旧道を切っているので途切れる。

しのお塚よりの展望は独歩の時と同じであるが、大船、藤沢、戸塚の近山には、高層住宅や無線塔、そして赤・青の住宅が切手を貼り付けたような格好で緑を食っている。ただこの頂より大磯・小磯の浜は見えないので、見出し山（林間病院のある）に行つたがここでも見え

ず。

大磯方面が見えるのは、しのお塚を下りて自動車道を西二百米した八千代酒店の処を左に曲がり、二、三百米七里が浜方面に行く所より見える。勿論当時こんな道は無かったので、峰づたいに歩いたのは八千代酒店の裏山より妙法寺の裏山に抜けたと思われはれる。今は通行不能だ。

山からは、小坪も葉山も三浦岬も見えるので、この近くで車座して壺酒を飲んだのだろう。

ほろ酔いの峰づたいで眺望絶景の処とは七里が浜方面に車道が曲る処、砂利道を二百米程行った所で突然展望が良くなり、東に逗子葉山、南に相模湾の彼方三浦岬、長井、油壺、城ヶ島の霞む所、大島の噴煙を雲と見て、西へ江の島、伊豆の山々を見る絶景地がある。現在民家でその山頂には登れないが、十程米登ってみれば尚更絶景であろう。

ここから下り坂となる植林された杉林は晝尚陽光を遮って三十数度の真夏日もここはひんやりとする。やがて極楽寺の裏山である。墓地を経て月影地藏の茅堂が見える。ここからは狭い谷戸に田圃があり、青々とした稲

穂が絨毯をなしている。

真紅な百日紅の花がお堂を護るように屋根に覆いかぶさっている。この都会離れた景色も独歩時代は当然な景色であったのだろう。感嘆の一句もない。小生八月九日の早朝この月影地藏に詣した折、近くの農家の老婆、茅葺に荒壁の納屋の軒下に吊るされた玉葱を二、三個取った後、庭の隅に積んであった雑草を背負籠に入れて谷戸奥の畑に向うに出会う。

この付近人肥の臭気が漂い、早朝とは云え真夏に鶯が鳴いていた。鎌倉の独歩の散歩道が途切れ途切れと云えこんな姿が残っているのは本当にうれしい限りである。独歩が、野よ山よ大空よ大海よ、冷酒三杯に舌鼓を打って、自然の賜を感謝する程の野性を何時までも失いたくないと願った鎌倉の裏山の、これ以上の破壊・泣き山にならざらんことを切に切に願うものである。

佐伯を出でて八年数ヶ月、十ヶ月の生活と淡い足あとを残して独歩が鎌倉をあとにしたのは明治三十五年十二月のことである。

(つづく)